

令和6年度卒業証書・学位記授与式式辞

学 長 森 下 宏 美

本日、晴れて北海学園大学を卒業される学生のみなさん、大学院を修了されるみなさん、まことにおめでとうございます。また、本日ご参列のご家族・関係者のみなさまにも、心よりのお祝いを申し上げます。

振り返ってみますと、新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のための厳しい行動制限が課せられていた時期は、対面での授業もかなわず、クラブ・サークル活動に思う存分打ち込むこともできませんでした。思い描いていた大学生活とはほど遠く、学業の面でも課外活動の面でも、そして生活の面でも、苦勞と不安の日々であったに違いありません。それらを乗り越えて、本日みなさんは卒業の日を迎えました。ともに慶びたいと思います。

北海学園大学での学生生活を終えた今、みなさんは、自分自身の成長をどのように実感されているでしょうか。また、こうなりたいと思う自分にどれだけ近づくことができたでしょうか。実現できたこと、達成できたこと、逆に、やり残したこと、得ようとして得られなかったものなど、さまざま思い浮かぶことでしょう。それらのすべてが、これからのみなさんの人生の糧となり、目標となるでしょう。そして、目標実現の努力の先に、ひとりひとりのよき人生を花開かせていただきたいと、心から願っています。

これまでみなさんが経験した「卒業」は、上級学校への進学を意味しましたが、本日の「卒業」をもってみなさんは、生活を営む現場としての社会へとスタートを切ります。そこでみなさんは、仕事を通じてさまざまな人々と関わりながら、人生を歩むことになるわけですが、その社会が今、大きな転機を迎えています。ICTやAIの発達、グローバル化の進行は、私たちの仕事のあり様を大きく変えつつあります。また、SNSの発達は、情報発信やコミュニケーションのあり方に多大な影響を及ぼしています。そして、地球温暖化や人口減少が、社会の存立そのものを脅かしています。みなさんがこれから就かれる仕事は、どのような分野の仕事であれ、これらの新しい現実への挑戦となるでしょう。

この挑戦はもうすでに始まっていますが、そこに必要なのは、新しい知恵の創造と、その知恵を活かす人々の協働です。みなさんが本学で身につけた学問する力が、その助けとなってくれます。学問は、他者と共有できる新しい知を生み出そうとする、社会に開かれた能動的な活動です。学問は決して学者や研究職の者だけがする、閉ざされた営みではありません。研究対象はあらゆる仕事の現場に見出せるでしょう。また、新たな知見を社会で活かしていくためには、学問の精神を身に着けた多くの人々の協働が必要です。みなさんには、学問をも一生の友として、新しい現実に挑み、よりよい社会の実現を目指していただきたいと思います。

もちろんそれは、みなさんだけにではなく、大学自らに課せられていることでもあります。みなさんの母校として、共によりよい社会を目指し、そしてみなさんの挑戦を応援し続けたいと思います。

北海学園大学は今年、前身である北海短期大学の開設から数えて、創基75周年を迎えます。その第2期生に、今年99歳になられる神馬文男さんがいらっしゃいます。神馬さんは、15歳で軍隊に入り、終戦後、2年間にわたってシベリアに抑留されました。神馬さんが再び故国の地を踏んだのは、21歳の時でした。その神馬さんが何よりも渴望したもの、それは学びの場でした。「北海学園大学がその望みをかなえてくれた」、神馬さんはそう語っておられます。卒業後、神馬さんは、中学校や高校で教鞭をとりながら、「自分を試したい」との一念で、国内外の大学で学びました。その間に、シベリア抑留記の編集や、ドストエフスキーの『罪と罰』の訳本の出版に携わるとともに、シベリア抑留体験を語る会の語り部として、戦争を繰り返してはならないと、今もなお訴え続けていらっしゃいます。「一回きりの人生をどう使うか。やろうと思えば何でもできる。たくさん学び、語り合って、悔いなく生きてほしい。」若い人たちに向けた神馬さんのメッセージです。私たちの大先輩のこの言葉を、その生き方とともに、胸に刻んでいただきたいと思います。私も、自身への励ましとしたいと思います。

最後に、みなさんの未来が明るく輝かしいものであることを心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。